

教育新報

新大教育学部同窓会
第 160 号

発行人 佐藤 重勝
事務局 新潟大学

教育学部内

TEL(025)263-6760

印刷所 (株) 文久堂



「同窓生の集い」に参加してみませんか

教育学部同窓会 会長 佐藤 重勝

わずか半年前までは、冷房のきいた部屋が天国のように思えたのが、嘘のようです。四メートルを越える積雪を記録するほどの厳しい冬となりました。今も身の危険を感じながら、雪の始末をされている方も多いのではないのでしょうか。安全に気を付けて過ごしていただきたいと願っております。

ところで、私たち教育学部同窓会では、大きな課題を抱えています。それは、同窓会を安定した組織にするとともに、それを強化していくというものです。そのためには、次の三つの問題に取り組みなければなりません。

一 会員の加入促進と支部組織の検討
加入促進については、教職を退いた同窓生、教職以外の職に就く卒業生に対する加入の働き掛けを、これまで同様に行きたいと思えます。

また、支部組織については、現在は、

県内の現職教員を中心に構成している市町村を単位とした支部だけです。しかし、今の組織と県外の会員や現職教員以外の会員を考慮した組織を検討していく必要があります。

今年度、永年会費制を導入し、入学時に三百十八名の新入生から同窓会費を納めていただきました。学生会員も含めて情報交換を行ったり、親睦を深めたりする会にしていかなければならないと思っています。

二 財政基盤の確立

本会の目的は、「会員相互の親睦と資質の向上を図り、母校の発展に寄与すること」です。この目的を達成するためには、会員の把握とともに、会費を納めていただく必要があります。

近年、個人情報問題に関連して、会員の把握が難しくなっています。このような中、支部長・学校代表者の皆

様には多大な御尽力をいただいております。心から感謝を申し上げます。

今後、できるだけ負担が掛からないような方法を検討していきたいと思えます。なお、会員の皆様には、異動の際は、支部長・学校代表者と十分に連絡を取っていただきたいと思います。

三 同窓会活動への参加

十月十六日、「第三十七回同窓生の集い」が行われました。学部協力を得ての演奏会では、市民の参加に比べて同窓生の数が少なかったように思われます。その後、大学の先生を含めて四十名の方々が、懇親会に出席してくださいました。昔を懐かしむ話だけでなく、こんなことに夢中になっているという刺激的な話も交わされました。

会報に「会員の広場」欄があります。若い会員が多く、頼もしく感じます。ぜひ、これまでに寄稿してください。会員の皆さん、次回の「第三十八回同窓生の集い」に参加してみませんか。

今年度を振り返ってみますと、「母校の発展に寄与する」については、財政的な面からも、ある程度達成できたのではないかと思います。

しかし、「会員相互の親睦」に関しては、まだまだ検討の余地があります。同窓生が「参加してみたい」というような同窓会活動を考えていかなければならないと思っています。

花鳥風月

十一月十三日、新潟大学ソフトテニス部OB会がホテル日航新潟三十一階展望室を会場に行われた。教育学部だけでなく、工学部、人文学部、経済学部、理学部、医学部、医療短期大学

部など、全学の卒業生約九十人が高原元教育学部教授の退官記念以来数年ぶり、または、卒業以来数十年ぶりに顔を合わせた。実は、当時十面あった新潟大学軟式庭球部の土のテニスコートの内、四面が学生寮、残り六面が砂入り人工芝（オムニ）のコートになったことを記念してのOB会開催となったのである。発起人は、最近卒業したばかりの有志と現役の大学生である。

当時の顧問で、今なお現役の全日本選手（壮年の部）である高原隆一元教授にも参加いただき、全員が学生時代にタイムスリップした雰囲気となった。現役の学生の戦績発表や卒業生の近況、社会での活躍・貢献などを聞き、胸躍る気持ちに浸ることができた。

高原元教授のご指導の言葉で印象的だったのは、「毎日、一百万千万を大切にすること」というお話であった。一：一日に一時間は読書をしなさい。十：一日に十人の人と話をしなさい。百：一日にラジオ体操など百回運動。千：日記も含め、毎日千字書きなさい。万：毎日一万歩は歩きなさい。生涯現役の秘訣がここにあった。（勇）

新潟大学全学同窓会

第三十七回同窓生の集い

今年は「第三十七回同窓生の集い」として、十月十六日土曜日に、新潟市だいしホールで「鈴木賢太（新潟大学准教授）氏、鈴木順子氏 ピアノ連弾コンサート」が開催されました。ピアノの連弾は初めてでした。

恒例のコンサートですが、同窓会の駒澤研修部長より、「おもてなしの心で」との声がかかり、受付をされたお客様を幹事がお席まで案内させていた



だきました。その

後は、同窓会の佐藤会長が開会の挨拶で述べられたように「心豊かで上質なひとときを」

過ごすこととなりました。演目も、モーツァルト、シューベルト、ラヴェル、ブラームスと贅沢なプログラムになりました。

コンサート後の懇親会で、「妻は自由には、自分は控えめに」とのご主人の言葉に「結婚六年目の初めての演奏会で、プログラムを通して、六年間を振り返る日々であり、幸せをわけていただいた」と奥様の言葉が続き、二人の温かいお人柄を感じるアットホームで上質な連弾となりました。

他のジャンル（シャンソン、カンツォーネなど）を聴けたら、聴衆の層もぐっと広がると思います。

・新潟市報、日報の催し物案内（無料）等を使っていますでしたら、活用



★アンケートより同窓会会員の声
・ブラボー！しなやかな奥様の音色とサポートのご主人の音色が見事でした。明日への活力がわきました。
・ピアノソロの演奏では聴く事のできない曲ですばらしい演奏でした。

・迫力だけでなく、優しく包んでくれる演奏で大変満足させてもらいました。

・プログラムのご主人の挨拶がすばらしく、感動しました。いつまでもご夫妻のご多幸をお祈り申し上げます。

・毎年、すてきな演奏会を催していただきありがとうございます。隣席の女性（八十三才）も、毎年、楽しみにされているとのことです。

・新潟市報、日報の催し物案内（無料）等を使っていますでしたら、活用

されたらよいと思います。

★アンケートより市民の声

・たまたま手にしたコンサートのちらしに早速はがきを出しました。私も友人や娘とよく連弾をいたします。上質なバランスのとれたお二人の演奏を聴けて幸せでした。プリモのブリリアントな響きと冷静な安定感のあるセコンド、うらやましいカップルに見えました。



◆参加者の声から

ピアノ連弾コンサートの参加して

加茂市立加茂中学校

栗林 操

秋の午後のひとときを楽しもうと、

初めて同窓生の集いのコンサートに参加しました。プロの演奏を聴くのも連弾を聴くのも初めての私にとっては、楽しみと、音楽が分からなくても大丈夫かなという不安で会場の扉を開けました。演奏が終わったときには心が軽くなり、気持ち明るくなっているのが自分で分かりました。普段の多忙な毎日を忘れさせてくれるようなほっとできる時間を過ごすことができ、また明日からがんばろうというエネルギーになったような気がします。

会場には同窓会関係者だけでなく、一般のみなさんも演奏を楽しみにたくさんおいでになっていました。改めて、音楽は音でみんなを楽しませ、心と心をつなぐんだなと実感しました。

また、同窓会役員の方々に混じって音楽科を中心とする後輩のみなさんが運営に当たっていました。大学を卒業した後、先輩と後輩がこのように一緒に仕事をするのも貴重なことと思うと同時に、同窓会のよいところだと感じました。お世話をしてくださったみなさん、ありがとうございました。

会員の広場

時がかわっても

十一期



佐藤 昌二

もう新潟大学教育学部を卒業してから半世紀に近い。入学

したころは、すでに新潟田分校は統合していたが、長岡分校と高田分校があり、前期の二年間は新潟、長岡、高田に分かれて勉学に励んでいた。

当時は青春を謳歌した人もいたし、学業に専念し、大学院に進んだ人もいた。また、当時の政治に不満をもち、世の中の制度を改善するため、政治に関わった人も多くいた。

そして、ほとんどの人が教員になり、子どもたちのかかわりを通じての喜怒哀楽を土産に退職を迎えた

さて、当時の教育と今の教育を比較した場合、何が同じで何が違うのか吟味してみると、なかなか難しい。

今の日本では二人に一人が大学に行くくご時世である。パソコン・インターネット、グローバル化という言葉が先行し、さらに、発達障害、モンスター

ベアレントという言葉も聞く。

今一番大切なことは、教育改革ではなく、理念や哲学に裏打ちされた教育に対する気概や熱意であろう。

健康を保つ



新潟市立岩室中学校

中澤 直子

小学生のころ、友達

と遊んだり運動したりするのが大好きで、学校行事も楽しみの一つだった。

そのくせ、肝心な時に風邪をひいたりする質(たち)で、リレーの選手に選ばれても運動会に出られなかったり卒業式でも具合が悪くなり退場したりした。中学校の生徒会役員選挙でも熱を出し、フラフラの状態で応援演説をした。ふがない自分に悔しい思いをするたびに、健康であることの大切さを痛感した。

そんなわけで「防げる病気やケガは防ぐ」「治らなくなつて、うまく付き合つて自分なりの健康を保つ」をモットーに生活し、進路選択にも生かした。

今、養護教諭として、子どもたちの健康づくりに携わることができて、うれしい。子どもたちには、好きなことをうんと満喫してほしいし、ここぞという場面で力を発揮してほしいと思う。そのために役立つ健康教育を目指して日々研鑽！日々実践！していきたい。

喜・努・愛・楽、そして感謝



新潟市立巻南小学校(講師)

伊比浩太郎

巻南小学校で初めて

教師という職に就き、自分の未熟さを感じなかった日はない。自分らしさを出したくとも、対応に自信がもてず、無難な言動をすることが多かった。子どもへの声掛けも授業も、手探りで進めていった。

しかしその中で、子どもたちの笑顔に「喜」びを感じた。まずは心の壁を無くそうと、一人一人を大切に見取って声を掛けるように「努」めた。日を重ねるごとに、子どもたちが「愛」おしくなった。不安よりも、子どもたちと過ごす時間が「楽」しかった。いつからか、自然に笑うことが多くなっていた。

これまでを振り返ると、湧き起こるのは同僚の先生方への感謝の思いである。氣遣つて励ましてくれた先生、優しく教えてくれた先生、笑顔で元気を分けてくれた先生。職員室の温かさが、不安でいっぱい私の私を支えてくれた。もともと経験と積み、教師力と自信をつけることで、教師としての自分らしさを出していきたい。私は、子どもたちの「喜怒哀楽」、そして感謝の気持ちを育む教師になりたい。

学校紹介①

特別支援教育のセンターとして

新潟市立西特別支援学校

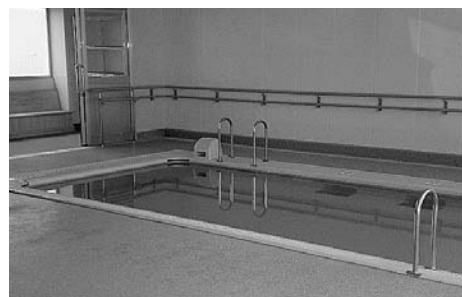
弥彦・角田のふもと、新潟市西蒲区巻の地に、新潟市立西特別支援学校は平成二十二年四月に開校した。主に知的な障がいのある子どもたちが通う小学部・中学部設置の特別支援学校である。

旧新潟市立養護学校の過密化に伴い「新潟市に第二の特別支援学校を」という多くの保護者のニーズを受け設置が決定された。設置場所は、「高等養護学校手まりの里分校」がある旧巻工業高等学校跡地に、旧校舎の改修及び新築校舎の増設工事を行った。



正門から新築棟をのぞむ

通年で使用できる
温水プール



以前の工業実習棟を特別支援学校として活用するということで、大規模な改修工事になった。

年間を通じて使用できる室内温水プール、宿泊学習ができる日常生活体験室、遊具のある中庭広場などが設置された。また、3階までのスロープ階段、エレベーターの設置による完全バリアフリー化、既存の階段も小学生用の高さのものに付け替えを行った。内装は、地元西蒲産の杉を使いぬくもりのある装いにし、知的な障がいある子どもに配慮した視覚的なサインを用いた教室表示なども設置した。

開校年度は、小学部三二名、中学部四十四名、計七十六名の児童生徒でスタートした。通学には、新潟市の西部地区（南区、西区、西蒲区）を3台のスクールバスを運行させている。

児童生徒は、知的な障がいのほか、

肢体不自由等を併せもつ重複障がいの子どもも含まれるなど、実態が多様化している。そのために、基本的には個に応じた指導計画や複線型の教育課程で対応している。

学校の特徴は、巻の市街地に隣接する地域のため、地域の人たちとの交流や、駅や商店、公共施設などの社会資源を活用した学習を積極的に進めている点、また、隣接する手まりの里分校との交流を通じて、小中高の一貫した教育が期待できる点などがあげられる。今後、自校の教育のみならず、地域の特別支援教育のセンターとして、小・中学校等に対する支援、教員や保護者への教育相談の実施、発達検査や教材の貸し出しなどを通して地域支援を行っていきたいと考える。大いに活用したい。



地域資源を活用した学習
(図書館の利用)

(文責 中川 一之)

平成二十二年 会務報告

平成二十二年

5・8 会計監査

5・8 第一回本部会

【平成二十一年度会務報告・
会計決算報告】

【平成二十二年活動の重点・
各部の活動計画・予算案】

6・5 学科代表者会・支部長会
評議会(新潟教育会館)

【平成二十一年度会務報告・
会計決算報告】
【平成二十二年活動の重点・
各部の活動計画・予算案】

8・4 教育新報第一五九号発行

8・24 全学交流会打合せ
(ANΛクラウン)

8・28 同窓生の集い役員打合せ会
(新潟教育会館)

9・14 だいしホールと事前打合せ

学校紹介②

どの子にも 学ぶ 喜びを！

阿賀野市立安野小学校

安野小学校は、国道460号線沿いのJR水原駅近くにあります。児童数284名。学級数は12。発達障がい通級指導教室が開設されています。

瓢湖にも近く、冬場には、学校周辺の田んぼで、白鳥の家族がえさをついばむ姿が見られます。

当校の教育課題の第一は、特別支援教育の充実です。いわゆる発達障がいと考えられる児童が、約12パーセントおり、通常学級に在籍しています。

このことを踏まえ、どの子も参加でき、互いの考えを伝え合うことを通して、学ぶ喜びを実感できる授業改善が求められています。

本年度は、阿賀野市学校教育研究会の指定を受けて、学習指導発表会を開催しました。

研究テーマは、「自分の考えをしっかりと伝えて伝え合い、やりぬく子」とし、副題として、「言語活動の充実と特別支援教育の視点からの授業改善」を掲げました。

ここでは、授業改善への取組について、紹介します。



公開授業の様子

一 研究の内容

研究仮説を「個々の児童の特徴を踏まえて自分の考えをしっかりと

もたせ、考えの違いについて検討し合う伝え合いの活動を組織すれば、授業に参加する喜びを感じ、課題の解決までやりぬく子が育つだろう。」と設定し、次の二つを柱として取り組みました。

柱① 児童の特徴を踏まえた考えの持たせ方

柱② 考えの違いについて検討し合う伝え合い活動の組織

二 研究の歩み

初任者からベテランまで、全学級で授業研究を行い、得られた知見を共有して日々の授業改善に生かしました。

三 成果と課題

柱①では、一時間の予定を示して見通しをもたせ安心させること、具体物や操作活動の例示等で課題を分かりやすく提示すること、考えを文字だけでなく動作や操作等で表すこと等の有効性がはつきりしてきました。

柱②では、個性的な考えを意図的に紹介させて問題意識を喚起すること、考えの違いや変容を板書で整理して示すこと等の大切さが分かってきました。



全体発表

今年度の研修を通して、授業改善への方策が見えてきました。また、県立新潟養護学校駒林分校や阿賀野市こころとことばの相談室等、特別支援教育にかかわる関係機関とのネットワークも構築することができました。

どの子も学ぶ喜びを実感できる授業づくりを目指して、これからも歩みを続けていきたいと思っています。

(文責 西澤 真一)

10・13	全学交流会事前打合せ (ANAクラウン)
10・16	【第三十七回同窓生の集い】 開催
10・23	【新大・全学同窓会交流会】 開催
11・15	今年度担当学部として実施
12・11	臨時正副会長・専門部長会議 (新潟教育会館)
平成二十三年	
1・20	教育学部教員・職員との 懇談会 (新潟会館)
2・24	教育新報第一六〇号発行
3・5	第二回本部会 (新潟教育会館) 【平成二十二年会務報告・ 各部活動反省・ 会計報告】 【平成23年度の活動方針・ 予算案】 【平成23年度本部役員 について】

全学同窓会交流会 記念講演・懇親会報告

去る十月二十三日(土)、ANAクラウンプラザホテル新潟にて、全学同窓会交流会が開催された。

本年度は、教育学部同窓会が運営担当であり、記念講演会と懇親会の運営にかかわってきた。

当日、柳原昌子教育学部同窓会副会長の進行のもと、講師に青柳正規氏(国立西洋美術館館長、東京大学名誉教授)を迎え、演題「パックス・ローマとパックスニッポニカ」ローマの平和と日本の繁栄」で講演をいただいた。

当時のローマ帝国がなぜ長期にわたって繁栄することができたのか、ポンペイの発掘調査等を通じて氏の



深い造詣をもとに示唆に富む話があった。

後段には、日本の現状に触れ、これから日本が繁栄を続けるには、何が課題となるのかをグラフ等視覚に訴えて話され、ぐいぐい引き込まれるうちに講演終了時間となった。

記念講演の後に、全学交流懇親会を同会場でもった。



武藤真理子教育学部同窓会組織部副部長の進行により、内田全学同窓会長の挨拶に始まり、各学部の新任の同窓会長が紹介され、佐藤重勝教育学部同窓会長も紹介された。和やかな雰囲気の中で各学部同窓生による交流がなされた。

同期生の活動

第二十二期(四十九年卒) 長岡分校同期会

佐藤 禎子

十一月三日、湯田上温泉「ホテル小柳」に於いて「第一回長岡分校同期会」が盛大に開催されました。

急な呼び掛けにもかかわらず、県内外から集った同期生は二十五名。三十九年前の教室とつながる顔がすぐに見付からない人もいましたが、あつという間にタイムスリップして、和気藹々の懇親会場には笑顔でいっぱい。たとえ、「髪」が「皺」が「体型」が学生時代と多少違っていても、同期生の気持ちはまだ若人そのものでした。



実は、この会は、現職女教師二人の「退職前にみんなに会いたい」の一言が始まりでした。そして、発起人の一人から、「まさか、本当に実現するとは」という言葉が出る程に、ある種の驚きの中で準備が進められました。

なぜなら、長岡分校出身者の名簿を

問い合わせた先の関係機関からは、その存在は定かでないとの返事。——かつて、新潟大学はタコ足大学と呼ばれ、教育学部の一・二年次が新潟・長岡・高田の三地区に分散し、三年次から新潟本校に合流していた時期がありました。が、その後、昭和五十一年に新潟本校に統合されてからかなりの時間が経過しています。

——それではと、卒業生名簿から記憶や伝手をたよりに集約し、一次案内を発送しました。結果、住所が見付からず返送されてきた葉書の多さにも驚かされました。

最終的には六十四名の住所を再確認でき、次回につながる会になりました。また、今回参加できなかった人から、「次回には是非参加したい」という声を聞くと、何かしら温かなつながりを感じ、心がほのぼのしてきます。

学部との懇談会

互いの課題を共有し、交流を深めた
懇談会・懇親会

交流部副部長 山下 あい子

一月二十日(木)、新潟市の新潟会

館において、新潟大学教育学部教員・職員と同窓会役員との懇談会・懇親会が行われました。毎年、同窓会の交流部が企画・運営する事業で、今年度も大勢の方々にご参加いただき、相互の交流を深める有意義な会となりました。

大学側からは、ご多用の中、五十嵐 尤二学部長様をはじめ、十五名もの教員・職員の方々からご出席をいただき、同窓会からは佐藤重勝会長以下十五名が出席しました。

懇談会では、最初に佐藤会長から、今年度教育学部の担当で開催された大学・全学同窓会交流会記念講演会・懇親会や、同窓生の集い等の事業成功の報告と協力への感謝の言葉がありました。また、安定した同窓会へと強化していくための三つの大きな課題、事業を充実させるための財政基盤の強化、今後の支部組織の在り方、同窓生の集いや全学同窓会への会員の参加率向上

等の課題について話がありました。

その後、同窓会の各専門部(研修・広報・組織・交流・事務局)の部長より、今年度の事業概要説明を行い、全学同窓会の取組状況についての報告もありました。

五十嵐学部長様からは、この三月に



教育人間科学部の最後の卒業生が巣立つこと、オープンキャンパスの盛況ぶり等についてご報告いただきました。また今年度から、独立行政法人となつて七年目、第二期中期目標期間(平成二二―二七年度の六年間)に入ったため、大学院充足率や就職率はそれぞれ九〇%を越えているものの、さらに向上させる必要がある、そのための取組として、一年からの実践的教育実習、学習支援ボランティア、芸術系の交流・貢献活動等について、具体的に説明していただきました。

後半の意見交換では、全学同窓会のカード事業推進部から、事業を支える財政基盤としてカード事業からの収益金が不可欠であること、そのために新規カード会員の獲得とカード利用促進への効果的な対策をお願いしたいとの要望がありました。また、教員就職率向上の課題とその解決策、中学校現場から部活動指導や技能教科担任の複数校兼務の現状と求められる教員の資質等について、活発に意見交換が行われました。

柳原昌子同窓会副会長のあいさつで懇談会を閉会しました。

会場を移動しての懇親会は、滝澤かほる副学部長様の乾杯のご発声で開宴となりました。



挨拶をする佐藤会長

和気あいあいとスタートしましたが、懇談会で出された数々の課題への対応や、大学と学校現場の双方向での情報交換など教育に関する尽きない話で熱気を帯び、予定時間を大幅に超えて語り合いました。

八鍬友広副学部長様からは、学部と同窓会の絆の深まりと、さらなる発展への思いを込めての万歳をいただきました。

最後に、森弘志同窓会副会長のあいさつがあり、今後、一層連携と交流を図ることを確認し、閉会となりました。会員の皆様には、今後も学部と同窓会に絶大なるご支援をいただきますようお願い申し上げます。

大学のコーナー

このごろ大学に流行るもの

新潟大学教育学部 副学部長 八 鋏 友 広

このごろ大学に流行るもの、夜討ち朝駆けリクルート・スーツを纏い往く学生、挨拶などもあらたまり、業者の人かと思いがうは、憂い顔した四年生、いやいや今はそれさえも、遅いとかかり三年生、エントリーだけはしてきたと、教授のわからぬ話なり。

もちろん人にもよるが、学生といえば、昔なら、髪はさばさ伸ばし放題、いずれ汚らしい恰好をしていたものである。弊衣破帽、などという、きどつたものでさえなく、ただ、だらしのないのが常であった。

大学教員などという、もとから非常識な人種となれば、そもそも就職活動などというもののさえ、ろくにしたことがなく、ひどいになれば、教員選考の面接で、はじめてネクタイというものをしてみた、などという手合いもあるだろう。

そういえば、就職活動というのは、今はシューカツというのであった。よくいわれることであるが、そのシューカツも、二十年前と今とでは、まったくの様変わりである。当時、企業は早めの人材確保のため、面接に来た学生

の引き留めに必死であった。今や、学生は数十にも及ぶ面接に行くとか。もつとも、新大の場合はそんなこともないのかもしれないが。

まことに買い手市場というほど、恐ろしきものはなし。しかもその売り買いとは、人間のことである。私の経験からいえば、これほど善良な人間もあるまいと思われる学生ほど、むしろ苦戦をするようである。

いったい、卒業の年度によって、これほど人の運命が変わってよいものであろうか。ひところ、自己責任、という言葉が大いに流行したが、卒業の年度などというものが自己責任であるはずがない。

このごろの学生には覇気がない、とか、本当に働く気があるのか、やれ草食系だの、ゆとり世代だの、近ごろの若者を貶める言葉は枚挙にいとまがない。まことにもって気の毒のかぎりである。

もつともそれも、半面では、この国と、この国の若者を心配するあまりのことではあろう。確かに、外国に留学する学生の数も激減し、ハーバード大

学の総長にさえ、日本の留学生に覇気なし、などと言われるようであれば、心配になるのもやむを得ない。しかしそれならば、もう少し若者を大事にしてはどうだろう。

どのみち卒業年度によって運命が決まるのだとすれば、運を天に祈るよりほかはあるまい。もし多くの人がそんなことを思うようになれば、努力や勤勉などといった、近世以来の日本人の心性も、漸く翳りをみせはじめるかもしれない。いやそれは、すでに黒々と、私たちの社会を彩っているのかもしれない。そろそろ本気で、若者たちの、つまり明日の社会の担い手たちの、努力や勤勉が報われる仕組みを作りなおすべきではないだろうか。

当人たちの、ポジティブ・シンキングや、積極性や、あるいはコミュニケーション能力などを育成することにも、もちろん意味はあるのだろうが、むしろ、そのようなことが可能となる社会を再構築する必要性に、私たちは迫られているのではないだろうか。

このごろの学生たちの、いわゆるぱりつとした装束に、隔世の感やら、世の無常とやらばかりを感じているわけにはいかない。今のこの状況そのものを打開していく、そのような人材を育成できないのかと、そんなことを考えさせられる日々である。

事務局だより

○1年間、関係各位にはご協力をいただきましてありがとうございます。

○昨年10月に、顧問の石川幸一様が逝去されました。ご冥福をお祈りいたします。

○大学・学生支援の充実を図りました。今年度から永年会費制を導入いたしました。今年度入学生から、卒業しても終生会員として大学や同窓会の活動の様子をお知らせいたします。今年度は従来の教員志望学生対象講座や卒業祝賀会への助成のほかに、新しくオープンキャンパスへの助成や長岡研修会参加バス代などの助成をいたしました。

○ホームページの一層充実を図ります。今年度パソコンの技術に卓越した同窓生が大学院に入学する予定なので、協力してもらう予定です。学科の集いや同窓生の集い、会議のお知らせなどは、ホームページでもご確認ください。

編集後記

教育新報第160号をお届けします。今年度から年2回の発行となっています。会員諸氏の声を紙面に生かしたいと思います。会員、支部・学科の情報やご意見等ありましたら、事務局までお寄せください。